

## 「私に起きている」

山形県 光傳寺住職 庄司憲昭

新型コロナウイルスの拡大により、お寺の中で過ごすこととなりました。

お寺での生活も対外的な行事は、ほとんどが中止や延期となり、普段は出かけているはずの家族も出かけずにいるため、一緒に過ごす時間が増えました。

しかし若い世代にとっては、生活リズムを保ち続けることは難しく、昼夜逆転・運動不足など、社会的にも様々な問題を引き起こしています。

そんな中、自宅でできるトレーニングのすすめなどの動画が、ネット上で流され、大手スポーツ用品メーカーが、こんな言葉をタイトルとして掲げ発信していました。

【一緒にプレーできなくても前に進もう。わたしたちは今、78億人のためにプレーしている。】と。

社会生活を送る上で、ともすれば大きな組織の一つのコマに過ぎない私。確かにそれも事実ではありますが、実は、一つのコマあつての社会生活です。

一人一人が『まず私が感染している可能性がある』と思い決めて行動することが、何より感染拡大の予防につながっていきます。

同時に、感染したご本人やご家族、医療現場の最前線で働く方々、消毒などの作業にあたっておられる関連業の方々などに対する、いわれなき偏見や風評、差別的な考えは、物事を他人事にすり替えてしまうところから生まれてきます。他に非を当てはめることで自分を正当化し、安心しようとしてしまう。これは、恐怖心がもたらす悲しい心の働きでしかありません。

しかしよく本質を見ると、このことは『今、私に起きている困難』です。なぜなら、私たちは今、人類として共通の脅威に向き合っているのですから。

金子みすゞの詩に『はちと神さま』があります。

『はちはお花のなかに、お花はお庭のなかに、お庭は土べいのなかに、土べいは町のなかに、町は日本のなかに、日本は世界のなかに、世界は神さまのなかに。そうして、神さまは、小ぢゃなはちのなかに。』

この詩に私が感銘を受けるのは、背景に調和と支えあいの精神を感じるからです。この詩の『はち』を『わたし』に置き換えるとうこうなります。

『わたしはお家のなかに、お家はお庭のなかに、お庭は土べいのなかに、土べいは町のなかに、町は日本のなかに、日本は世界のなかに、世界は神さまのなかに。そうして、神さまは、小ぢゃなわたしのなかに。』

神さまとは、仏様同様に世の中を救う心や力の源のことです。この心と力が私たちに秘められている。私はそう受け止めています。

これからも、新型コロナウイルスが旧型になるその日まで、ウイルスと共に、人々と共に、和して予防に心がけ、支えあつて取り組んで参りたいものです。